

会議名称	第1回 おむつリサイクル・ごみ減量推進会議		
開催日時	令和5年5月15日(月) 13:30~15:00	開催場所	掛川市役所5階全員協議会室
参加者	検討委員：守屋委員長、井上副委員長、鶴飼委員、東森委員(代理)、紺野委員、山口委員、横山委員 アドバイザー：石川先生 コーディネーター：岡田氏 掛川市：久保田市長、都築部長、深田課長及び環境政策課		
1 開会 (13:30) (司会：深田課長) 2 委員委嘱 (久保田市長) 3 委員長及び副委員長指名 (久保田市長) 4 委員 自己紹介 5 掛川市長挨拶 (久保田市長) 久保田市長：第1回掛川市おむつリサイクル・ごみ減量推進会議に出席を賜ったこと、委員またはアドバイザー、コーディネーターを引き受けていただいたことに感謝申し上げます。 ・掛川市は、環境省の調査で人口10万人以上50万人未満の部において、1人1日あたりのごみ量が全国一少ない「ごみ減量日本一」という結果である。おおよそ670gという数字であるが、全国にはこれの2倍程度排出している市町もある中で、大変名誉なことであると思っている。 ・日本一という結果は、多くの市民の皆様にごみの分別、古紙の回収などに協力していただいているおかげであるが、この現状に満足しているわけではない。ごみというものは、日々私たちが生活をする中で生じるものであり、今現在も本当は燃やすべきではないようなものも含め、焼却しているのが実態である。 ・私の子供は双子であることから、おむつの消費量が2倍になる。週に2回収があるが、我が家だけでこんなにゴミを出して良いものかと罪悪感を持ってはいるものの、そこに出すしかないわけで同じ気持ちの方がいるのだと思う。水の塊のようなおむつを焼却すること自体が焼却炉の負担になり、本当は望ましくないことだと感じていた。 ・この会議では、おむつや生ごみ、製品プラスチック、裏紙、剪定枝などといったものを燃やさずに、再資源化できないだろうかということをご議論いただきたい。 ・将来的にはごみとして燃やすものがゼロになるような世の中を地方都市である掛川が先取りをして、ごみ減量そしてカーボンニュートラルに繋げていきたいと考えており、皆様にはご協力をお願いしたい。			
6 議題			
(1) 会議設置の目的と目指す姿 について (資料1) (説明：石山主幹、陸田室長)			
～ 説明 ～ (参考：資料1-1～1-4)			
① 実現したいこと、必要なこと、具体的な取り組み			
② 具体的な取り組み、チャレンジすること			
③ 解決したい社会的課題			
④ 地球温暖化対策実行計画			
(2) 検討事項とスケジュール について (資料2) (説明：石山主幹)			
～ 説明 ～ (参考：資料2-1, 2-2)			

(3) 掛川市のごみ処理の状況と目指す姿(資料3)(説明:谷中)

～ 説明 ～ (参考:資料3-1～3-4)

① 掛川市のごみ処理の現状

② 掛川市のごみ処理の流れ(現在とこれから)

③ 掛川市の目指す姿

意見交換(質疑含む)

守屋委員長:基本的なことだが、説明する上でリサイクルや再資源化、資源化、カーボンニュートラルといった言葉の定義づけをお願いしたい。

・森林吸収のところで、掛川にある広大な茶園は森林に比べて吸収量が多いと聞いているが、どの程度反映されているのか現状の分析結果を知りたい。

陸田室長:カーボンニュートラルの定義であるが、CO₂の排出をゼロにするわけではなく、一定量排出がある中で、新エネの導入や森林吸収によって相殺しゼロにするという意味である。

また森林吸収及び茶園の吸収でどのぐらいその見込んでいるのかということについては、資料の1-4の裏面に記載がある。掛川市の面積の4割強が森林であり、CO₂を吸収しながら成長していく中では、年間4.6tほど吸収すると見込んでいる。茶園については、市内では10%程度吸収するが、お茶に使用する肥料の製造時にCO₂を排出するという話もあるため、現在研究をしているところである。

石山主幹:言葉が分かりにくいという点について、皆様にしっかりと説明し分かるようにしていきたい。先ほど申し上げた5Rは、リフューズ(ごみになるものを使わないこと)、リデュース(ごみを減らすこと)、リユース(繰り返し使うこと)、リペア(修理して長く使うこと)、リサイクル(形を変えてもう一度使うこと)などの定義も出てくるので、わかりやすいように説明していく。

井上副委員長:今回、ごみの分別について検討をしていくが、その過程で市民の方の生の声を聴く場などは考えているか。

石山主幹:とても大事なことだと思っている。今回集まっていたいただいたこの会議には、市民の皆様からお声を聴くような形態(区長会連合会やまち協、福祉事業関係、食品業者など)の皆様が集まっていたいている。これから調査をしていく中で、皆様に話を聞けるように検討していきたい。

鵜飼委員:一般的には使用済みのおむつはきれいなイメージがないが、どのように市民のイメージを変えていくかなど戦略はあるか。

石山主幹:まさにおむつリサイクル・ごみ減量推進会議の中で一番大きなテーマではないかと思っている。おむつのリサイクルについては、不安の声があることを聞いている。手法や技術的などところもしっかり検証し、掛川市においてはどのようなやり方ができるのかを研究していく必要があると思っている。

- ・環境省でもおむつのリサイクルに向けたガイドラインが出されており、大きく分けるとおむつからおむつにリサイクルするパターンとおむつから固形燃料に変えるという2つのパターンがある。
- ・掛川にあるユニ・チャームは、今、鹿児島県志布志市でおむつからおむつへリサイクルする実証実験を行っており、実際に介護施設等で利用してもらっているようである。やはり、処理技術やイメージは大事であると思うので、掛川市でやる場合には、ご協力いただける事業者も含め研究を進めると共に、事業戦略についても考え、検討する必要があると考えている。

紺野委員：外国では個人でごみを分別しない。どう分別するか、捨てるか、捨てないものか、燃えるごみか、燃えないごみかといった言葉を含めた問題がある。

守屋委員長：5年ぐらいイタリアにいたが、言葉が分からない、出し方が分からない中で非常に苦労した。やりたくてもできない。そういった方も居るのではないかと思う。どのように対応したら良いか。

紺野委員：言葉の壁があるので、日本に初めて来たときはトイレットペーパーをどこに捨てれば良いかわからなかった。ブラジルではごみ捨て場のところに持っていくため、日本でもそうしたら「なんでここに捨てるの？」ということになった。

- ・言葉が全然通じず、当時の担当者は手伝ってくれたが最近ではサポートする人がいなくなっているという話を聞く。

山口委員：自宅でキエーロを平成27年頃から当時モニターとして使い始めてから6年間ぐらい使っている。主人と2人、360日ぐらいで計算すると、おおよそ2160kgぐらい自分の家でキエーロを使って処理している。

- ・生ごみを分別したら1週間に1回ごみを集めてくれたら十分なぐらいにごみがコンパクトになった。カラスの被害もない。
- ・キエーロは自分の中でツボにはまり、「今日のごみはどのぐらいだろう」と楽しんで使っている。生ごみやおむつの分別も市民が楽しんで行える方策やごみが資源になるということを市民に理解してもらうことが出来ればさらに取り組みが進むと思う。

守屋委員長：コンポスター・キエーロ・電動生ごみ処理機があるが、すべて使っていない。要するに、面倒くさいとか、電気代がかかるとか、虫が湧くとか、色々な要素があって長続きしない。今後は長続きするような、サステナブルな取り組みをしていきたいと思う。

横山委員：おむつに関しては、社会福祉法人を営んでいるため大量に排出しており、単純な削減というのは難しい現状である。おむつの製造企業には、再利用しやすい製品を作っていただくことをお願いしたい。施設として事業系ごみを排出するにあたり、多額の産業廃棄物処理費用を支払っている。業者の回収前に乾燥させる等の処理をして排出すれば、軽量化（ごみの削減）できるということもあると思う。施設長をやっていた時に、乾燥処

理に関する機器等の導入を検討したがかなり高額であった。生ごみについては、施設内にコンポストを設置することが難しいため、法人としても困っている現状がある。

- ・疑問として、びんやかんのリサイクルにあたり、回収費用だけでなく戻ってくるお金がどの程度あるのか、また市民がごみとして排出し焼却された焼却灰は最終的にどこに埋め立てられているのか等、具体的な現状が分からないことがある。
- ・仮に分別区分や手間が増えたとしても、自治会（市民）に還元されるような仕組みができること、またメリット・デメリットが市民に分かるような施策であれば、協力は得られやすいのではないかと。

石山主幹：「見える化」の部分は大事であると考えている。びん・かん、ペットボトル、容器包装プラスチックについては、現在も資源化物として回収している。今後、現在の容器包装プラスチックと併せて、製品プラスチックについても回収するよう進めていく。

- ・現在、回収している資源化物の処理については指定法人に委託しており、市内での収集委託費と併せて費用がかかっている。リサイクルの対価として戻ってきているお金もある。市民の意識づけをするにあたり、費用の見える化というのも大事だと考えている。
- ・最終処分に関して、焼却灰については大須賀の最終処分場に埋め立てている。今後新しい仕組みを構築するにあたり、最終処分場への埋め立て量も減らすことが出来る仕組みづくりになるよう進めていきたい。

(代理) 東森氏：スーパーマーケットの立場として2点。

- ・市民の皆様が参加できる買い物の仕方として、「買いすぎない」ことや「手前どり」についてPR、取り組んでいる。
- ・業務上発生してしまう食品廃棄については、製造過程を見直すことで事業所からの廃棄物として排出しないよう心掛けています。
- ・三善としては、今秋、食品ロス削減とフードバンク活動支援に繋げる「寄付付き商品販売企画」を農林水産省と連携し実施予定である。

石川先生：おむつのリサイクルはチャレンジングで面白そうだと思います、この話を引き受けた。ユニ・チャームや花王など大手は実証実験を進めており、これから 徐々に動いてくるだろうと思う。掛川市がこの勢いでチャレンジすれば、フロントランナーになっていく。

- ・子どものおむつの特徴は、家庭から排出されることと数年間という期間限定であること。また、家庭から排出されるため、薄く広く少量しかなく、これらを集めるのが大変で、コスト面でもハードルが高い。
- ・大人のおむつは2種類あり、在宅と施設からの場合がある。施設の場合には、大量に排出され、リデュース（減量）は難しく、リサイクルに割り切るしかない。施設から排出される大人のおむつは、1ヵ所で経常的にたくさんあるため子ども用に比べるとハードルは低い。現状、産業廃棄物処理していることも含めると、処理前の工夫は大事である。

- ・ユニ・チャームは鹿児島県志布志市で家庭系（子ども用おむつや在宅高齢者の大人用おむつ）を対象にしているが収集が非常に大変、花王は施設等を対象とした取り組みを実施し、施設内に炭化装置を設置し、乾燥・粉碎・蒸し焼き、最後は炭にして土壌改良剤などに使用するというコンセプト。
- ・同じおむつのリサイクルでも対象とするものが家庭系なのか事業系なのかで全く別物。おむつ全体を指さず、カテゴリー別（子ども・大人・家庭・施設など）に丁寧に課題を解決していけば可能ではないかと考えている。
- ・生ごみでも同様で、キエーロを例とすると何が原因で続かないのかは人それぞれ異なるため、柔軟な方策の提案が必要になる。

7 その他

都築部長：掛川市が目指す「焼却や埋め立てに頼らない、循環型のまちづくり」はこれから求められる社会の姿であると考えている。

- ・資料4-3にあるとおり、年間約16億円かかっているごみ処理費用の約30%が削減できスキームを整えることが出来れば大きな成果が出る。
- ・今回の取り組みにおいて、焼却量44%の削減を達成できるとCO₂排出量が約1万2千t削減できることについても大きな成果となるため、皆様の御協力を賜りたい。

深田課長：第2回掛川市おむつリサイクル・ごみ減量推進会議

令和5年7月14日（金） 13：30～（予定）

久保田市長：それぞれのお立場から大変良い議論ができた。

様々な御意見を賜りながら、皆様と一緒に頑張っていきたい。

8 閉会（15：00）

—以上—